第2部

これからの県立大学への期待とプロジェクト

創立30周年記念式典理事長挨拶

静岡県公立大学法人 理事長
本庶　佑

本日は大変御多忙の中、静岡県立大学創立30周年式典に御来賓の県副知事吉林様、県議会副議長薮田様をはじめ、多くの皆様に御臨席賜りまして、大変ありがとうございます。心から御礼申し上げます。

すでに御承知のとおり、昭和62年に3つの大学を統合してスタートした静岡県立大学は、来年4月に創立30周年を迎えます。

更に平成19年には、公立大学法人に移行して運営形態が変わりました。このような中でこの大学に求められているものは、地域への貢献ということだと思います。

私は、大学の使命は新たな知を創造し、人類の文化資産を増やすということが重要だと考えています。そういう環境の中で、若い学生が啓発されて、社会に貢献する人材が育ち、そのことが地域にまた還元して国際レベルの新たな創造へ繋がっていくものと期待しています。

地域に根差しながら、世界に羽ばたく人材を育てていく。ということが我々の使命だと思っております。

本学の源流であります静岡女子薬学校の開校以来、すでに非常に多くの人材がこの地で学び、また、巣立っております。静岡県立大学となった以降だけでも約2万人の卒業生がいます。

大正から昭和、平成と3世代の長きに渡り、この大学を地域の皆様が支え、また、お互いを持ちつ持たれつの非常に緊密な関係でやってこれたということを深く感謝いたしております。

県立大学は御承知のように、薬学・食品・看護、また短期大学では歯科衛生・社会福祉、これらの授業におきましても、実習等々で地域の関連施設に大変なお世話になっております。また、国際関係学部・経営情報部含め、卒業生の就職におきましても、大変多くの県内外の企業に御支援をいただき、幸いなことに就職率はほぼ100%であります。このことを、我々としても大変誇りに思っておることでありますし、また御子弟を本学に入学させていただきました、保護者の皆さまにとっても非常によい特徴として認識いただいていると思っております。

昨今、世界情勢は非常に混迷を極めている状況に思います。人類の未来が楽観できない。我々は不安感をもっております。寛容・寛大な考えではなく、排他・孤立が声高に叫ばれる時代となってまいりました。このような現象がグローリズムの反動と捉えるのか、資本主義の限界と捉えるのか、大学人の叡智が今こそ本当に求められる。

人口増、環境問題、エネルギー、食糧問題。多くの課題があります。これらの課題に日本がまた静岡が無縁であるということはありません。

我々の活動はどこまでも、このような社会の問題とその背後にある課題を追及し、今後とも常に変化しながら、常により高い目標目指して、大学の教職員と一体となって進んでいくことが必要だと考えています。

本日御臨席を賜りました皆様には、これまでの御指導、御鞭撻また数々の御支援、感謝申し上げますとともに、今後とも一層の御支援、御協力を賜りますようお願い申し上げます。簡単ではございますが、御挨拶とさせていただきます。

創立30周年記念式典学長式辞

静岡県立大学 学長
鬼頭　宏

本日、ここに静岡県立大学、短期大学部の創立30周年を祝う記念式典を開催することになりました。御多忙な折がら、かくも大勢の皆様の御来臨を賜り、盛大に式典を迎えることができましたことを壇上より厚く御礼申し上げます。

本学は、静岡薬科大学、静岡女子大学、静岡女子短期大学の3つの大学を統合して1987年に現在の静岡県立大学及び短期大学部になりました。前身の各学校が、それぞれ役割を果たしながら、今、静岡を代表する一つの高等教育機関として成長し、県民の皆さんの要請にこたえるべく、努力してまいりました。先人の教職員の努力ももちろんございますが、県民の皆さんのご支援があってのことと、大変感謝しております。

今、時代は地域社会にとって、非常に厳しい環境にございます。人口は減少しておりますし、静岡県の経済もこのところゼロ成長となっております。私どもは、教職員が一丸となって、地域の未来を担う人材を育てるとともに、より高度な研究を通じて、地域の発展のために貢献することを、約束いたします。

大学自体も今後は、困難な時代を迎えることが明らかになっております。2年後の2018年度から18歳

人口が120万人を切り、どんどん減少していると予測されております。学生が集まらず、学生募集が困難で経営難も生ずるということを心配する大学もございますし、学力、あるいは教育の水準を維持することができるのかという懸念もございます。そういう意味で大学もまた、今岐路に立たされていると言ってよろしいかと思います。

私は幸運にも、栄えある30周年記念式典を学長として迎えることができました。誠に光栄に存じます。しかし同時に、今のような状況を考えますと、大変重い責任を感じております。

私は学長に就任した際、「地域のために、地域とともに」という言葉をモットーとして掲げ、また「地域をつくる、未来をつくる」という標語で、私の、本学が目指すべき方向を示させていただきました。県立大学でありますので、地方創生を主導して、静岡県の未来をつくることに邁進するのは、言うまでもありません。しかし、本学が果たすべき役割は、地域の中だけで済むということではないと思っております。歴史を鑑みますと、人口が減少する時代は、実は必ずしも、陰鬱な、停滞した時代ではないということが明らかであります。むしろ、次の時代をつくる大きな文明の転換期であるというべきと思います。従いまして、今日、様々な困難に直面している大学でございますけれど、その役割ははっきりしております。今まで通りではいけない。自から次の時代をつくることができる、創造力を持った人材を世に送り出す。これが大学の果たすべき役割なのではないかと考えております。

本日は、その点につきまして、私が尊敬します猪木武徳先生に記念講演をお願いいたしました。タイトルは「産業社会と大学の未来」です。

これからの大学の30年を考えることは、これからの地域、日本の、あるいは世界の未来を考えることに他なりません。猪木先生の講演を通じて、21世紀の大学に求められるものは、何なのか。またどのようにして、未来をつくるべきなのか。皆様方とご一緒に、大いに論じるきっかけとなることを期待しております。

私たちは今、これからの30年先を見据えて、大学改革を進めようとしております。地域との交流を深めて、「地（知）の拠点」事業を進めておりますし、またその一環として、県・市と連携協定を結んでおります。また、地元との一体感をよりよく表すことができるように、来年4月よりキャンパス名を草薙キャンパスに変更することを決定いたしました。また、これからの話ではありますけれども、お茶に関する総合的な知識や観光ビジネスを学べるコースを設置しようと、今、研究を進めております。県内の企業とも研究交流やインターンシップなどを通じて、更に連携を深めていきたいと考えております。もちろん海外の大学との交流は、今まで以上に拡大しようということで、副学長と一緒にいくつかの大学を訪問しているところでございます。また留学生の受け入れのためにも、国際交流会館のような施設がどうしても必要になります。県は独自に構想をもっていますので、調整を図りながら、独自の施設を我々も整えたいと考えております。

これまで個人から、あるいは企業から、継続して学生に奨学金をいただいてまいりましたが、これからもより一層、自主的な財源を確保すべく、新たに寄附金制度をつくったところでございます。

今まで同様、これからも本学の教育、研究活動を温かく見守っていただきたいと思います。また力強い御支援を賜ればと思います。

本日は30周年記念式典に御参加いただき誠にありがとうございました。簡単ではございますが学長としての挨拶と代えさせていただきます。

創立30周年記念式典特別講演（要旨）

産業化社会と大学の未来

講師　大阪大学名誉教授
猪木 武徳

静岡県立大学の創立30周年をお祝い申し上げます。創設にあたって御尽力なさった方々、この30年間、大学の発展に御努力をされた教職員とそれをサポートされた皆さんに心からの敬意を表したいと思います。

近年、日本の高等教育について様々な改革が文部科学省から打ち出されてきました。教養部の再編、大学院重点化、国立大学の法人化、そして公立大学も法人化され、まさに改革フィーバーと呼んでもいいような状態です。

確かに改善すべき点は私の周辺を見まわしましても多々あったと思います。しかし制度をいじれば全てうまくいくわけではありません。制度とか法律を変えれば一朝一夕にして事態がよくなるということはありません。こういうフィーバーで振り子が一方に振り切ってしまい、大事なものを見失ってしまう恐れもあります。この点に関しまして、大学は将来どういう形になればいいのか、静岡県立大学のような公立大学の将来を考える場合に、どの点が大切かというような点を考えてみたいと思います。

話の副題として「個の自立と地方分権の視点から」と付けましたのは次のような理由によります。日本は明治の新国家建設によって、幕藩体制の中にあった地方分権の精神を衰弱させたという面があります。自分の身の回りの問題、地域の問題を自分で決めるという気概が弱まったのではないか。自己の確立、地方の自立は、デモクラシーにとって大変重要な前提条件になるわけですから、地域における人材の育成の問題は、極めて大きいということになります。こうした点を念頭に置いて現在の日本の大学教育や研究の問題点をいくつか指摘したいと思います。

文部科学省の政策は、選択的に研究拠点を設定し、そこに集中的に資金を投入するというものです。理学・工学などの高額な実験設備を必要とする研究分野に関しては、こうした拠点主義、集中と選択という戦略は合理的かもしれません。しかし社会科学、人文学系の分野では、こういう拠点主義で国の研究費を配分するというのは研究の自由を奪うだけでなく、多くの無駄を生み出す可能性があります。

また国際的な「発信」のための英語の重視が、母語の軽視を生んでいるように思います。英語は今や多くの学問の分野での国際的なコミュニケーションのツールになりました。しかし英語教育のウェイトが話す方に傾き過ぎてるのではないか。言葉はコミュニケーションの手段である前に、まず思考にとって不可欠な道具です。言語がなければ人間は考えることができません。言語を用いて思考したものや感じたことを表現する。英語で会話できるということは楽しく望ましいことですが、まずは母語で正確にしっかり文章を理解する力、読む力、書く力を養うことが軽視されてはなりません。

もう1つは大学と産業の関係です。大学は社会の変化に無感覚であってはならないし、社会が大学や高等教育に何を求めているかということを意識することは大事です。しかし産業界の要請をそのまま受け入れて、即戦力なり実益という事だけを考えて、研究なり教育を行うことに終始してはなりません。知識を何かに利用したいという欲求と、純粋に何かを知りたいという欲求というのは、まったく別のものです。知識を利用するということだけに傾くと、本来の「知りたい」という自由な視点や発想と、根源的な疑問や内発的な関心を抑圧してしまうかもしれません。ですからすぐ

に役に立つテーマということだけでカリキュラムが組まれると、カリキュラムの内容がやせ細ってしまいかねません。

一般に学問をサイエンス・エンジニアリング、人文学・社会科学に一応分けますが、それぞれの分野で追及される「真理」は異なった性質を持っています。科学では、実験などを通して厳密かつ正確に何かが論証されれば、それが「真理」だというふうに真理という言葉を用いることが普通かもしれません。

実は学問の中には、必ずしもサイエンスの手続きで「論証」できないが、曖昧なものを曖昧なものとして「探究する」という分野もあるわけです。例えば哲学ですとか、倫理学、美学などは数理的に論証する学問ではない。「真理らしさ」をめぐって探究するタイプの学問です。こうした学問が軽視され忘れられると困ったことになる。なぜなら、われわれの現実の生は厳密かつ正確な「真理」だけで成り立っているのではなく、わからないこと不確実なこと、曖昧なことに満ちており、それにいかに対応するのかという知恵が必要だからです。想像力を働かせ判断する。そういう想像力と判断力をベースに「真理らしい」ことがらを理解しなければならないのです。その想像力と判断力というのがわたしの考える「教養」というもののイメージです。

この点を説明するために、福沢諭吉の考えを紹介しましょう。『文明論之概略』の中で、文明というのは、人々の生活が楽になる、豊かになるという面と同時に人間社会の品位が向上することだが、その文明の進歩にとって必要なものは知恵と徳の2つだと福沢は考えます。その智と徳をさらに公と私の二つに分割しますと4つのエレメントからなるマトリックスができあがります。

その中で「私智」というのは、物の理を究めてこれに応じる働きを指し、工夫の小智といわれ、英語や数学ができるかというのが私智の例です。また「私徳」は、金銭に清廉か貞節かなどの自分自身の心の行儀である。福沢は、日本人は歴史的に見てもこれら私智・私徳を非常に重視してきたと言います。しかし文明の進歩にとって非常に重要なのは、公智・公徳だと。「公徳」というのは公正、正直、勇気、名誉を重んじるというような社会や人間関係の中で現れる徳です。福沢が最も重視したのは「聡明の大智」とも呼ばれる「公智」です。それは物事の軽重大小を分別し、軽小を後にして重大を先にし、何が大事かを見極める力です。この価値判断力こそ「教養」と呼ぶべきものなのです。

そういう教養は、専門か教養かの「あれかこれか」ではなくて、専門へのベースや土台となるべき知恵なのです。その知恵は専門外のことを知っているという知識ではなく、知識を求める原動力となるような知的欲求を含むものです。普通、知識が増えると知らない事が減ると感じるのですけれども、内発的な力を持った知性はそのようなものではない。ある哲学者は知識の量を球体に例えています。球体を立方体の箱の中に入れると、知識が増えると、その球体は膨張します。一般には、球体とその立方体の箱の隙間が「分からないこと」だと考える。そして学ぶと知識が増えるので未知の部分、わからない部分が減っていくと感じる。しかし活きた知恵はそういうものではない。実はわからない部分というのは、その立方体と球体の間の隙間ではなくて、その膨張した球体の表面が外部と接する部分、これがわからない部分だというわけです。論証して終わるのではなくて、更に知りたいというようなタイプのその知識を求めるという姿勢が非常に大事だと。

私生活も社会生活も政治の世界も、わからないこと、予期せぬことでいっぱいです。そういう予期せぬことに対応できるような精神的な強さ、知的な粘り強さといいますか、そういうものを鍛えてくれるものとして、私は古典というものをもう一度見直したらどうかというふうに考えます。

外国の大学の生協書籍部に行くと使われている教科書が並んでいます。それを見ると古典が多く置かれています。ところが日本では、古典そのものを読む学生もいますが、大体ちょっとお手軽な解説本で済ませます。本来、古典を読むということは、教養、つまり判断力と想像力を訓練する方法であったと思います。日常的ならざるものに直面した時に、それに対応できる力を養うために、古典は人類の知的遺産としての大いなる力を秘めているのです。ですから私は学生にとにかく、いい本を読みなさい。いい本、特に古典を読むこと、そして旅行をしなさいとしばしば言ってきました。

大学教育では、数学とか言語、物理、哲学などの

基礎的な科目を学んで、論点的な思考を身に着けて、そして自分の感性とか考え方と正確に文章に書けるようにすることが重要です。そして高校の教育と大学の教育のさらに大きな違いというのは、知りたいと思うことを自分で徹底的に調べ、それを書き記す力を鍛えることです。

以上のことを前提に、最後に公立大学にはいかなる役割があるのかということについてお話したいと思います。今や公立大学は88で、数で国立大学を追い越しました。実際、公立大学は日本のこれからの高等教育を担う上で重要な位置を占め始めています。

ここで改めて冒頭で申しました地方分権の問題を強調したいと思います。徳川時代の諸藩は、武士の高等教育機関として藩校をもっていました。その藩校が廃藩置県で事実上なくなり、新しい学制が敷かれた後に大学や専門学校もできるわけです。明治維新の後に士族の反乱が起こります。士族の反乱は、禄を失った武士が経済的に困窮して反乱を起こしたと説明されることがあります。それ自体間違いではないのですが、大きな原因は、新しい新政府ができたときに、政府の重要なポスト、産業活動の中心ポストが、だいたい薩長藩閥の人々に独占されてしまったわけです。地方の有為の人材は行き場を失うわけです。政治体制も中央集権の傾向を強めてくる。だから地方は何事にも中央に順応するという姿勢が生まれた。教育も徹底して中央のコントロールを受けるようになる。そうした体制は現代でも残っているわけです。そう考えると、地域の優れた人材を公立大学が育てるということがいかに大事かということが分かるわけです。

その土地をよく知る人がその地域に定住して、地域を良くしようとする気概を持つ。地方分権の問題として、税制、交付税などのお金の配分が強調されますが、忘れてはならないのは人材の問題です。そのためにも、県立大学、地方の公立大学がさらに魅力増すための方策を考えねばなりません。

一つの例を挙げましょう。アメリカには、私立大学で優れたリサーチ・ユニバーシティ、リベラルアーツ系統の学部教育を重視する私立大学と同時に、良質な州立大学も多くあります。私立の4年制大学の平均の年間授業料は約320万円。そして州立大学の場合、州外学生は240万円、州内の学生は94万円と平均で大体2.5倍の差がついています。日本の場合、国土も狭いですし、国税と地方税の構成の差もありますが、住民税の高さを考えても授業料の差別化は当然と考えられましょう。優秀な学生を集め、将来地元に貢献してもらえるような装置や仕組みを考えてもいいのではないでしょうか。

もちろん安定した財政基盤を築くことは、今の時代大変難しくなりました。運営交付金自体が減少し、公立大学が減少していく可能性もあります。したがって公立大学は魅力のある高等教育機関としての経営戦略を考えねばなりません。そのような機能を持つ行政部門を強化して、経済的・財政的な問題に対応しなければならないのです。

積極的な経営という点でひとつだけ付け加えます。1996年にオックスフォード大学がビジネススクールを設立しました。ビジネススクールをつくるときに、古典教育のメッカのオックスフォードに何故ビジネススクールだという議論もあったようですが、ビジネススクールをつくるということに踏み切った理由というのが面白い。「古典教育を守るためにビジネススクールをつくる」という2枚腰ですね。何かがいいと思ったら、全部そっちに流れ、冒頭で申し上げた振り子のように片方に振れてしまうのではない。異質なものを取り込みながら新しい力を得るというイギリスのリベラリズムの伝統から生まれたバランス感覚が読み取れるような気がするのです。

大学はその時代の社会的要請を強く意識しつつ、「真理」と「真理らしさ」を探究するために大事な精神を守らなければならない。大学は世界の動きに押し流されるのではなくて、価値の選択肢を世間に示すことができるような、そういう努力をすることがこれからの大学に求められていると思う次第です。

10年後の静岡を創るスーパーセミナー

知の丘を往く

静岡県立大学副学長／創立30周年記念事業実行委員長
小林 裕和

静岡県立大学の存在意義を、創立30周年に当たり顧みたいと考えた。本学は静岡県の最高学府として、将来に渡り「知の拠点」であり続けられればと望む。そのためには、地域の産業と県民の福利を牽引する方向性を世に向かって発信すべきではないか。本企画は通常の公開講座と異なり、行政（静岡県、静岡市）、産業界、市民のそれぞれの目線に立った講演、さらにテーマごとに学術的見地からの分析を大学教員が加える。そして、これら講師による講演に引き続く討論会を重視し、一般参加者にも議論に加わっていただく。最終的にこのセミナー内容は、ホームページや書籍媒体を介して世に発信するというものである。

2015年7月以降、「食文化みらい創造推進特別委員会」[委員長（当時）:村上光廣 静岡商工会議所副会頭／鈴与（株）・相談役] と連携し、静岡商工会議所・新産業開発振興機構に事務担当を置き本スーパーセミナー立ち上げの準備を行ってきた。2016年4月に、「食文化みらい創造推進特別委員会」 の委員長が大石 剛 静岡商工会議所副会頭 [（株）静岡新聞社社長] に交代になり、これを機に、（株）静岡新聞社とも共催とさせていただくことになった。

本寄稿の時点で、第2回まで実施しているが、参加者は130名～150名であり、今後の回の申込みでは200名に迫るものもある。参加者層は、高校生から80歳以上にまで及ぶが、50代が最多であった。参加者のうち「満足」との回答は90%に昇った。不満点として、参加者の議論への積極的な参画に工夫を要する指摘が複数寄せられた。

各回の企画に当たっては、多くの方々にご助言・ご協力を賜った。講師、座長および司会者としてプログラムに記載の方々に加えて、行政からは、吉林章仁 静岡県副知事、難波喬司 静岡県副知事、木苗直秀 静岡県教育長、山本高匡 静岡市企画担当局長、赤堀文宣 静岡市経済局長、木村精次 静岡市観光交流文化局長、産業界からは、酒井公夫 静岡鉄道（株）会長／静岡商工会議所会頭、岩崎清悟 静岡ガス（株）会長、大橋 弘 （株）静岡銀行常務執行役員に対して、深甚なる謝意を表させていただきたい。また、本企画の広報においては、（株）静岡新聞社、静岡商工会議所、静岡県商工会議所連合会、静岡県経営者協会に大変お世話になった。さらに、運営に当たって、倉橋 豊 静岡商工会議所理事（当時）、風間禎之 静岡商工会議所産業振興部新産業課長、小堺昭宏 静岡商工会議所産業振興部新産業課係長、大須賀紳晃 （株）静岡新聞社取締役・社長室兼秘書部長、植松恒裕 （株）静岡新聞社編集局長、小阪秀彦 （株）静岡新聞社営業局次長兼企画推進部長、大林 寛 （株）静岡新聞社営業局企画推進部副部長、佐藤祐介 （株）静岡銀行地方創生部ビジネスリーダー、石川健太郎 鈴与（株）経営企画室長、清川 誠 静岡鉄道（株）人事部長に、これらの方々のご協力に対し衷心よりの謝意をここに記録させていただきたい。

鬼頭 宏（静岡県立大学学長）

開催概要	
第 1 回	日　時：平成28年12月3日（土） 会　場：静岡県立大学 テーマ：そして誰もいなくなった～人口流出とその対策 座　長：静岡県立大学学長　鬼頭 宏 講　師：静岡県政策企画部長　森 貴志 静岡市企画局次長　前田 誠彦 静岡県立大学経営情報学部講師　岸 昭雄 静岡県移住相談センター相談員　宮嶋 千恵美 日本茶業中央会会長（元掛川市長）　榛村 純一
第 2 回	日　時：平成29年1月21日（土） 会　場：しずぎんホール　ユーフォニア テーマ：静岡を買いますか?～地域産業の活性化 座　長：静岡県立大学副学長　奥村 昭博 講　師：静岡県理事（産業戦略担当兼新産業集積担当）　渡辺 吉章 静岡県立大学食品栄養科学部特任教授・茶学総合研究センター長　中村 順行 静岡県立大学経営情報学部教授　岩崎 邦彦 静岡大学情報学部准教授　狩野 芳伸
第 3 回	日　時：平成29年2月11日（土） 会　場：静岡県立大学 テーマ：人・モノ・カネが静岡を駆け巡る～産業基盤の刷新 座　長：静岡県立大学副学長　奥村 昭博 講　師：中日本高速道路（株）東京支社沼津工事事務所所長　黒田 健二 鈴与（株）取締役　野村 博 （株）CREA FARM代表取締役社長　西村 やす子 静岡鉄道（株）不動産アセットマネジメント事業部長　川井田 智英 司　会：（株）静岡新聞社、静岡放送（株）シニアプロデューサー　澤木 久雄
第 4 回	日　時：平成29年3月11日（土） 会　場：静岡県立大学 テーマ：沸騰する地球。私たちは生き残れるのか～災害・持続可能社会 座　長：静岡県立大学副学長　小林 裕和 講　師：静岡ガス（株）執行役員エネルギー戦略部長　中井 俊裕 静岡県立大学食品栄養科学部教授　谷 晃 静岡県立大学経営情報学部教授　湯瀬 裕昭 静岡県立大学グローバル地域センター特任准教授　楠城 一嘉 司　会：（株）静岡新聞社、静岡放送（株）シニアプロデューサー　澤木 久雄
第 5 回	日　時：平成29年4月8日（土） 会　場：静岡商工会議所静岡事務所 テーマ：静岡発、ジェンダー平等社会～女性の活躍と社会的包摂の地域づくり 座　長：静岡県立大学国際関係学部教授　犬塚 協太 講　師：静岡県立大学国際関係学部教授　津富 宏 静岡県立大学経営情報学部講師　国保 祥子 特定非営利活動法人男女共同参画フォーラムしずおか　代表理事　松下 光恵 富士宮商工会議所女性会相談役　佐野 道子 司　会：（株）静岡新聞社、静岡放送（株）シニアプロデューサー　澤木 久雄

開催概要	
第 6 回	日　時：平成29年5月6日（土） 会　場：しずぎんホール　ユーフォニア テーマ：旅人来りて日く、厠所在哪里?（トイレはどこですか?）～観光と海外展開 座　長：静岡県立大学副学長　奥村 昭博 講　師：静岡鉄道（株）企画部長　水野 雅晴 （株）ジェイティービーITセキュリティ対策室長　北上 真一 （株）静岡銀行国際営業部国際営業統括グループ長　齋藤 一史 静岡県立大学薬学部教授　鈴木 隆 静岡県立大学経営情報学部教授　尹 大榮 司　会：（株）静岡新聞社、静岡放送（株）シニアプロデューサー　澤木 久雄
第 7 回	日　時：平成29年6月17日（土） 会　場：静岡県立大学 テーマ：何歳まで生きたいですか?～医療・介護 座　長：静岡県立大学副学長　今井 康之 講　師：静岡県公立大学法人理事長（京都大学 名誉教授）　本庶 佑 静岡雙葉学園理事長（東京大学 名誉教授）　榊 佳之 静岡県立大学看護学部教授　渡邉 順子

小林 裕和（静岡県立大学副学長）

楠城 一嘉（静岡県立大学グローバル地域センター特任准教授）

奥村 昭博（静岡県立大学副学長）

企画イベント

静岡県立大学創立30周年記念事業実行委員会では、記念事業の一環として、教職員、学生及び同窓会等が主体となって大学のアクティビティーを学内外に向けて発信する「企画イベント」を募集しました。

20件もの応募があり、審査の結果9件が採択され、平成28年度1年を通じて実施され、創立30周年を盛り上げました。

■ 地域経営研究センタービジネスセミナー「静岡発!ブランドをつくろう」開催

地域経営研究センターは、静岡県立大学創立30周年記念事業として、ビジネスセミナー「静岡発!ブランドをつくろう」を、平成28年11月3日、谷田キャンパスにて開催しました。

当日は、県内外から、経営者、公務員、学生など200名を超える来場者がありました。

はじめに、センター長の岩崎邦彦教授が、「モノづくりを超えるブランドづくりへ」とテーマ提起をした後、(株)サンファーマーズの稲吉正博社長が、「高糖度トマト アメーラの挑戦」と題して、アメーラトマトのブランドづくりの取り組みを紹介しました。続いて、シーラック(株)の望月洋平社長が「バリ勝男クンの挑戦」と題して、バリ勝男クンのブランドづくりの事例紹介を行いました。講演後に、稲吉氏、望月氏、岩崎センター長によるパネルディスカッションを実施しました。

参加者からは、「ブランドづくりの上で重要なことを知ることができた」「地域ブランドに取り組んでいる事例について話が聞けて良かった」など好評を得ました。

■ 茶(ドリップ式個包装)の作成
－30年後も「お茶の県大」と印象づけるために－

静岡県立大学の印象としてお茶が常に上位に上げられ、本学でも設立当初から茶の研究に注力し、学内でも大きな位置をしめてきています。

そこで、静岡の県大=お茶(の研究をやっている)というイメージを強く印象付けるためにも個包装ドリップ式のお茶(2個入り)を作製しました。飲んだ方からはおいしかった等感想もいただき、大変好評でした。

また、ハラール認証も取り、本学でのハラールに対する研究、取組についても説明することができました。地域・産学連携推進室だけでなく、学生室、広報・企画室、COC、大学の式典等で配布し、年間を通し大学全体でのお茶の取組の周知に貢献しています。

創立30周年のみならず、県大グッズとして販売してはどうかという声もあり、今後検討していきたいです。

■「県大での思い出写真でモザイクアート」

剣祭実行委員会として創立30周年を記念してモザイクアートを実施しました。内容は創立30周年ということで、静岡県立大学での思い出の写真を剣祭実行委員会のほうに送っていただきそれらの写真を使ってモザイクアートを作成するということです。対象者は静岡県立大学の在校生や卒業生、事務員の方などとし、写真の募集枚数は1000枚にしました。作成にあたり提供していただいた写真は、合計で1030枚になり見事目標を達成することができました。写真を提供していただいた皆様に感謝いたします。

モザイクアートのデザインや大きさにつきましては剣祭実行委員会で検討し、決定しました。大きさは縦3m横4mで、デザインは静岡県立大学を象徴とするモニュメントにしました。モザイクアートの展示は10月29日、30日の第30回剣祭当日にし、モザイクアートのお披露目は剣祭1日目に行われますオープニングセレモニーで行いました。オープニングセレモニーには多くの方に来ていただき、たくさんの人の前で披露することができました。剣祭にきていただいた皆様に見ていただけたかと思っております。

創立30周年企画のモザイクアートの作成にあたって御協力していただいた皆様や学校関係者の方々に感謝いたします。

■静岡県立大学「フードサイエンスネットワーク」発足記念シンポジウム・交流会

平成28年11月5日（土）に、静岡県立大学「フードサイエンスネットワーク」発足記念シンポジウム・交流会を看護学部棟13411教室および学生ホールにて開催しました。

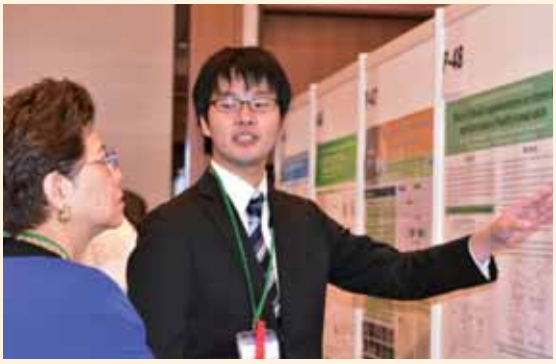
本シンポジウムは、静岡県立大学フードサイエンス事務局（食品栄養科学部卒業生・大学院修了生 有志の会）主催のもと、静岡県立大学、食品栄養科学部・大学院、食品栄養科学部・大学院後援会、創星会（同窓会）の後援を受け、約150名の食品栄養科学部・大学院の卒業生、修了生、在学生、現旧教員が参加しました。

シンポジウムでは、食品栄養学部のこれまでの研究史、現在及び未来の構想について本学部の現旧教員に講演を頂き、さらに現在研究分野で活躍している卒業・修了生から、現在の研究及びこれからの食品栄養科学分野の未来について発表頂きました。

また、シンポジウム終了後の交流会では、参加者の親睦を深め、本学部から発信された、そして未来の「食と栄養・健康の科学」の更なる発展を目指した意見交換が行われました。

■「30年後も健康で長生きする食事について考える」

平成28年11月18日(金)、日本平ホテルにて、第3回薬食国際カンファレンスとのジョイントシンポジュウムとして開催しました。国内外の一流の研究者による、健康長寿に関与する講演を聞き、学生や教員が30年後も健康で長生きする食事について考えました。講演者と題目は、早田邦康先生(自治医科大学附属さいたま医療センター)による「ポリアミンによる寿命延長の背景—遺伝子異常メチル化の抑制—」、Valerie Schini-Kerth先生(ストラスブール大学薬学部)による「天然物による血管エイジングと老化の遅延効果」、Vikineswary Sabaratnam先生(マラヤ大学)による「食用キノコの神経炎症軽減作用—機能性食品としての可能性」、Tze-Pin Ng先生(国立シンガポール大学医学部)による「高齢者における茶の健康効果」、およびCecilia C. Maramba-Lazarte先生(国立フィリピン大学・国立健康研究所、ハーブ医学研究所)による「熱帯性抗真菌薬としてのメディシナルハーブ」であった。参加者は200名を超え、活発な討論が行われました。



■ノルディックウォークで地域・大学健康交流!

11月6日、12月4日、1月29日の3回、「県大を歩こう!! ノルディックウォークで健康づくり!」と題して体験講座を開催し、3回で延べ123人が参加しました。

「健康」をキーワードに、地域に開かれた大学として大学のイメージアップに貢献するとともに、地域と大学の交流の場を提供し、地域活性化の一助となることを目指しました。薬学部大石客員教授のご協力のもと、広報委員会と「ふじのくに」みらい共育センター(COC)とで共催しました。

回を重ねるごとに参加者が増え、小学生から、最高齢の84歳までが、ポールを持って美しい自然の中をともに歩く時間と楽しさを共有しました。

学術的知見に基づいた基礎講義は大学での開催にふさわしい内容であり、初めてノルディックウォークに触れた多くの参加者から好評を得、今後も継続してほしいという声が続出した30周年にふさわしいイベントとなりました。

■ こども学科主催　保育シンポジウム「子ども・子育て支援新制度2年目 ―改めて保育の質を考える―」

去る12月3日（土）小鹿キャンパス短大部講堂に於いて、保育に関する講演及びシンポジウムが開催されました。午前の基調講演では、東京大学大学院教育学研究科教授であり、内閣府子ども子育て会議委員、厚生労働省社会保障審議会委員、国立教育政策研究所委員等を務められている秋田喜代美氏が、「保育の質を考える:外の目 内の目」と題して国際的なデータを元に話をされ、午後のシンポジウムではそれを受けて、文京区立お茶の水女子大学こども園園長　宮里暁美氏、NPO法人なのはな理事長　岡村由紀子氏、御前崎市教育長 篠田暁美氏がそれぞれの立場から意見を述べられ、更に参加者からの質問を受けて保育の質についての議論を深めました。参加者は外部参加者226名、本学関係者31名の計257名を数え、保育関係者以外にも学校関係者、行政関係者などの参加があり好評でした。

■ ボアジチ大学交流10周年記念 ー歴史的視点から見たトルコ外交の今ー

2017年1月20日（会場:本学経営情報学部棟4111講義室）に、ボアジチ大学（トルコ）との協定締結10周年を記念する特別講演会（広域ヨーロッパ研究センター主催）を実施しました。佐藤真千子講師（国際関係学部）の進行により奥村昭博副学長・国際交流委員長、六鹿茂夫広域ヨーロッパ研究センター長、ボアジチ大学のメフメット・オズカン学長、タネル・ビルギチ学長補佐・国際交流委員長からのご挨拶、県大テレビが制作した両大学の留学体験を映像化した動画上映が行われました。続いて、日本研究者のセルチュク・エセンベル名誉教授が「グローバルな歴史的視点から見た日本・トルコ関係」と題し、19世紀の日本とトルコの西洋文明の受容による近代化の流れの違いについて論じました。国際政治学者のギュン・クット教授は「中東の何が悪いのか?―不確実性がもたらすトルコの試練」と題し、トルコが自立的外交から方針転換した経緯について講義した。

■ 静岡県立大学創立30周年記念シンポジウム SD研修会　男女共同参画で拓く大学の未来

男女共同参画推進センターでは、大学創立30周年記念シンポジウムとして、全教職員を対象のSD研修会「男女共同参画で拓く大学の未来」を開催しました(全学FD委員会共催)。開催日時は2017(平成29)年3月3日午後1時30分～3時45分、開催場所は4111講義室、参加者数は79名でした。この研修会は、大学における男女共同参画の意義と必要性について教員、職員ともにより理解を深め、大学を挙げた取組への契機とする目的で実施されたもので、東京大学大学院総合文化研究科教授の瀬地山角氏による基調講演1「なぜ大学で男女共同参画の推進が必要なのか」、東京大学男女共同参画室専門相談員の山口喜志子氏による基調講演2「東京大学男女共同参画室の取組みについて」、鬼頭宏学長他2名の本学教員も加わったパネル・ディスカッションの3部で構成され、参加者との質疑応答も含め大変熱心な討議が行われました。

地（知）の拠点整備事業

■「ふじのくに『からだ・こころ・地域』の健康を担う人材育成拠点」の推進

●持続可能な健康長寿社会づくりの担い手の育成

静岡県は、全国トップクラスの健康長寿県として、健康寿命を延伸する取組が進められているほか、農産物・水産物が豊富で、食品関連産業が集積する特色から、次世代の食品関連産業を創出する取組も進められています。その反面、若年層人口の流出が進み、超高齢化への対応が課題になっています。

本学は、文部科学省21世紀COE及びグローバルCOEプログラム（H14～H23年度）の活動を通して、最先端の健康長寿実践科学の学術基盤を国内外に発信し、静岡県における健康寿命（H22年度全国第1位）の延伸に貢献してきました。

また、文理融合による教育の推進、地域に開かれた大学として、地域社会と協働した取組を進めてきました。

こうした取組が評価を受け、本学のプログラム『ふじのくに「からだ・こころ・地域」の健康を担う人材育成拠点』が、平成26年度に文部科学省「地（知）の拠点整備事業（COC事業）」の採択を受けました。

本プログラムは、大学の教育改革を通じて、健康長寿社会づくりを牽引する地域人材を育成するものです。地域を志向した教育、研究及び社会貢献を通じて、地域課題解決能力を培い、健康長寿社会の創造に資する人材を輩出するものです。あわせて「からだの健康」「こころの健康」に理系・文系の学部が融合し、「地域の健康」を組み入れた健康長寿文化を創成し、地域の健康長寿拠点を形成することを目指し、静岡県、静岡市、牧之原市の3つの自治体を連携自治体として協働による活動を進めています。

●持続可能な健康長寿社会づくりの担い手の育成

地域の課題を解決するため、地域とともに、世代・分野・職種を越えチーム活動を牽引する能力を「コミュニティ・ワーク力」として定義し、これに必要な「健康長寿文化を支える知識・技術・意欲」、「チームの形成能力」、「地域社会のイノベーションを担う能力」の3つの要素を身につけた、健康長寿社会を支える人材の育成に努めています。

●教育分野での取組

学生に地域課題の認識と課題解決に取り組む意欲を涵養するため、教育改革を実施し、平成26年度に「しずおか学」科目群を開設しました。「しずおか学」科目群では、静岡に特化した地域の文化や産業等を学び、地域を愛し、地域に貢献するマインドを醸成するとともに、「健康長寿文化を支える知識・技術・意欲」を持つ人材を育成しています。

また、チームケアの技術と地域貢献への意欲及び自己効力感を高め、健康長寿社会の創成に資する専門職を育成することを目的に「チーム形成演習科目」を実施し、薬学部（薬剤師）、看護学部（看護師）、食品栄養科学部（管理栄養士）を対象に、「チームの形成能力」を高めています。

●研究分野における取組

健康長寿文化の創成には、文理融合の取組が不可欠であり、学際的な研究・活動を推進するため、健康づくりプロジェクト、人口減少問題プロジェクト、地域づくりプロジェクトの3つのワーキンググループを設置し、各学部教員及び学生が参加しています。

教員においても、地域を志向した研究を進める機運を高め、地域課題に資する研究を推進するため、公募による地域志向研究を実施しました。採択を受けた地域志向研究では、学生とともに、自治体首長や職員との協働、地域をフィールドとした活動が活発に行われています。

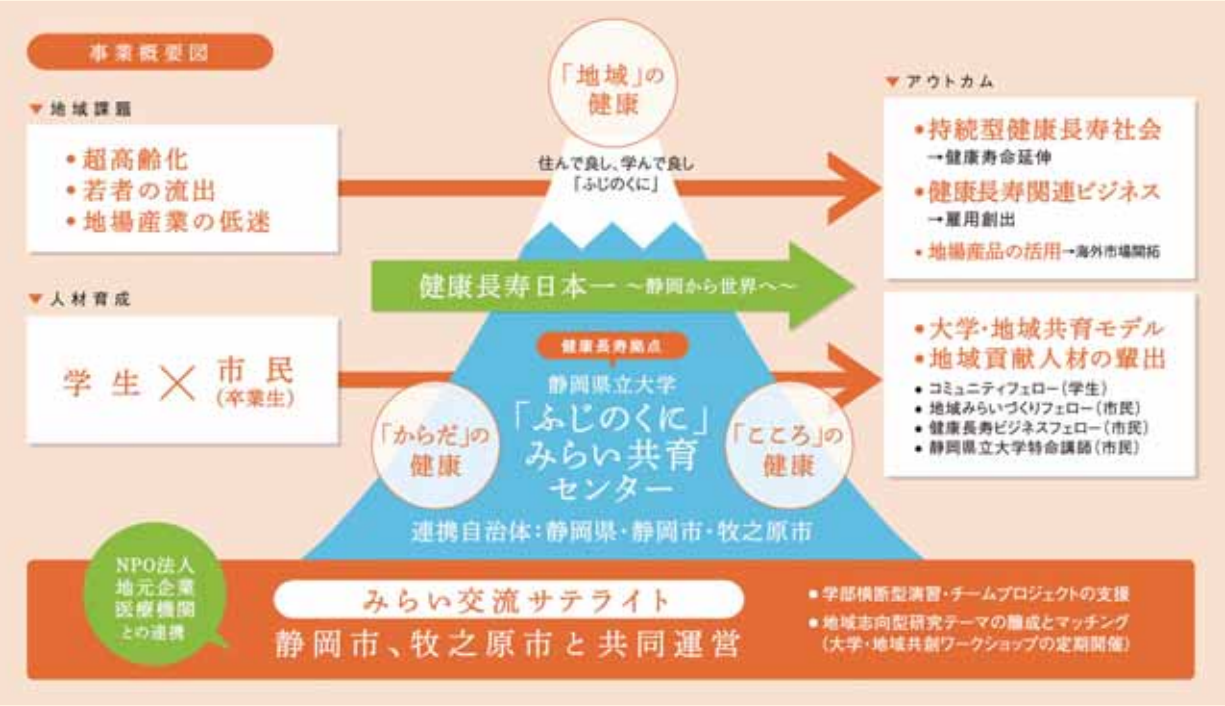
●社会貢献分野における取組

事業における取組や成果を社会に還元するため、毎年度「大学・地域共創シンポジウム」を開催しています。平成27年度は、「地域の健康を「幸福度」から考える」をテーマに地域の魅力、QOL（生活の質）に

関する提言を行い、平成28年度は「超高齢社会の地域を支えるチームづくり」をテーマに、住民が最期まで安心して暮らせる「まち」の実現に向けて考える機会を提供しました。

そのほか、静岡市、牧之原市に設置した「みらい交流サテライト」を中心に、教員・学生と地域住民・自治体職員をつなげる活動を進めており、ワークショップやイベント、出前講座などの開催を通じて、学生を地域と共に育てる土壌づくりとしての地域交流、教員・学生による研究の推進を支援しています。

また、人材育成は学生に対してだけでなく、地域で活躍する地域人材を育成する「地域づくり人材育成講座」や卒業生や専門職を対象とした実践教育プログラム「しずおか学び直し塾」を開催し、社会人への教育を通じた社会貢献においても健康長寿社会を支える拠点として活動を行っています。



文部科学省「地（知）の拠点整備事業」について

文部科学省では、平成25年度から大学等が自治体と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める大学等を支援することで、課題解決に資する様々な人材や情報・技術が集まる、地域コミュニティの中核的存在としての大学の機能強化を図ることを目的として「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）」を実施しています。

平成27年度からは、地方創生の中心となる「ひと」の地方への集積を目的として「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」と事業内容を変更しています。

なお、COC大学は、引き続き大学COC事業を実施するとともに、COC+大学が行う事業に参画することとしています。

産学官連携事業

■ 大学の知を社会に還元する県大の産学官連携事業

本学では、開学以来、静岡県の外郭機関として教員が企業との間で共同研究や学術研究をおこなってきました。平成11年　学術審議会答申において、学術研究の目指すべき第三の方向として、産学連携の推進を中心とする「社会への貢献」が明確に位置づけられ、産学連携の意義や今後進めるべき諸制度の改善等について述べられました。それを受けて、本学においても、平成12年度　産学連携推進委員会、発明委員会を設置、及び、受託共同研究規程を整備しました。続いて、平成15年度 産学官連携推進コーディネータを配置、平成19年度に産学連携室を設置し、産学連携に対する体制を整えてきました。

現在「地域をつくる、未来をつくる」の理念のもとに、本学では、教育、研究とともに、地域貢献を進めています。特に、企業等と共同研究を行い、大学の知を広く社会に役立てる産学連携を活発におこなっています。

産学連携の実績（件数）

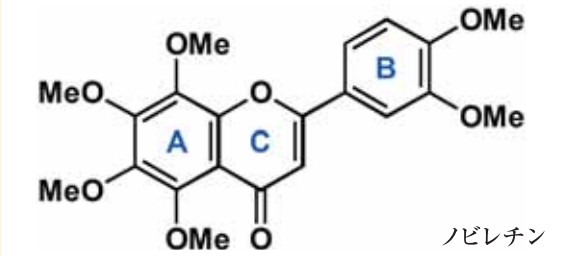
年度	受託研究	共同研究	奨学寄附金	計
24	37	58	102	197
25	32	55	104	191
26	48	56	125	229
27	66	54	102	222

産学連携にご興味のある企業、事業者、行政等の方は、是非、県立大学地域・産学連携推進室にご連絡ください。

次に、本学が推進してきた産学民官の連携による商品化の事例を紹介します。

■ 柑橘果皮由来ノビレチン 試薬の商品化

古くから「温州みかんの医者いらず」などとも言われ、静岡県の「温州みかん」は健康と密接な関係にあると言われてきました。柑橘類の乾燥果皮は、陳皮（ちんぴ）として漢方や健康食品、身近な食品としても七味やカレールー等にも使用されています。ノビレチンは、柑橘果皮に多く含まれるフラボノイドの一種であり、発ガン抑制、血糖値上昇抑制、リウマチなどの炎症抑制、さらには認知症の改善効果などの医薬品として期待される多彩な生物活性が知られています。そのため、本学を始めとする薬食研究を推進する多くの研究者たちが、入手を熱望してきた化合物です。しかし、天然から抽出し、純品を確保するには煩雑な精製操作や方法が必要とされるため高価（天然抽出物：20,000円/10mg、和光純薬工業(株)）*1であり、量の確保も難しく、動物を用いた研究の推進に支障をきたしています。薬学部菅教授は、「真に実用的」なノビレチン合成法の開発にも成功し、さらに、この合成ルート方法は特許成立（第4559531号ノビレチンの製造方法）の後、共同研究先のウシオケミックス(株)が量産合成に成功しました。本合成品は、既存品の20分の1といった試薬としての価格破壊（55,000円/500mg、和光純薬工業(株)）*2も実現することができました。その結果、本学を中心に活性評価をおこなうグループや動態解析をおこなうグループなど、10を超える研究グループへの提供も達成でき、これまで不可能であった多くの実験動物での試験も可能となりました。適切な対象疾患の特定、スクリーニングの諸問題を総合的に解決する研究を推進中です。さらに、^{11}Cラベル化ノビレチンの高速合成方法を開発し、マウス生体内のPET解析にも成功し、動態解析にも実績を有しています。このような広範な分野横断型のノビレチン研究は、世界的にも本学のみが推進可能なオンリーワンプロジェクトです。



ノビレチン

*1 <http://www.siyaku.com/uh/Shs.do?dspWkfcode=149-07521>
*2 <http://www.siyaku.com/uh/Shs.do?dspWkfcode=149-09341>

■「けっこうかみごたえあるドーナツ」の開発

良く噛んで食べることが食育において重要であることから、良く噛む習慣が身に付くような食品の開発を目的として、短期大学部歯科衛生学科木林准教授と(株)白帆タンパクが共同で、静岡市産学交流センター「地域課題に係る産学共同研究委託事業」に採択され、液体こんにゃくを利用した豆乳・おからドーナツを開発し、商品化しました。小麦粉におからと豆乳を混合し、さらに液体こんにゃくを練り込み、噛みごたえを高めています。また、このドーナツを食べることで、よく噛んで食べる行動と意識が向上することが検証されており、学校給食での利用も検討されています。

けっこうかみごたえあるドーナツ

■「けんこう弁当」シリーズの開発

食品栄養科学部 市川准教授と学生が、(株)杏林堂薬局の管理栄養士との協働により、栄養学のエビデンスに基づき、栄養バランスがよく、おいしい健康弁当を開発しました。毎月テーマとメニュー内容を更新し、県内杏林堂薬局の店舗および大学内の売店で販売しています。食材の種類が日本一といわれる静岡県の特色を活かし、地産地消をコンセプトにして、「カラダオイシイ弁当シリーズ」(対象別に「菜食健美」「質実豪健」「生涯青春」の3種類)、「家康に倣(なら)う長寿弁当」(デリカテッセン・トレードショー「お弁当・お総菜大賞2016」優秀賞受賞)、「杏林堂薬局管理栄養士弁当シリーズ」を展開しています。

家康に倣う長寿弁当

■「米粉パンミックス粉」の開発

小麦、鶏卵、牛乳などを原因物質とする食物アレルギーの増加が、世界的な問題となっています。そこで、これらの食物アレルギーを持つ人も安心してパンを食べることができるように、食品栄養科学部 新井教授が米粉を使用したパン用のプレミックス粉を開発し、(株)ウェルビーフードシステムが静岡市産学交流センター「地域課題に係る産学共同研究委託事業」に採択され、商品化しました。グルテンを含まない米粉を良好に膨化させるための技術として、大豆タンパク質の気泡形成能と熱凝固性を利用しています。また、生地の安定性を高めるために、グアー豆を配合しています。なお、グアー豆には中性脂肪の上昇を抑制する効果が報告されています。さらに、家庭で焼きたてのパンを食べることができるようにするため、ミックス粉に水を加えてよく混ぜ、紙製の容器に入れて室温で一定の高さまで発酵させ、オーブンで焼くだけの簡単な操作で調理が完了するように、細かい工夫がなされています。

静岡県立大学は、これからも大学の研究成果を世の中に役立てる産学連携活動をさらに推進し、産業の活性化、社会貢献にも取り組んでまいります。

米粉パン　ミックス粉

静岡健康・長寿学術フォーラム

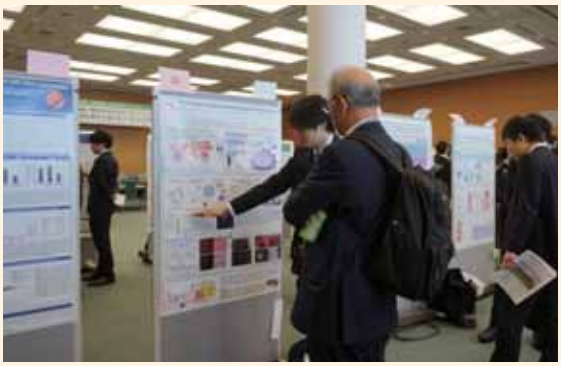
■ 静岡の健康・長寿をリード

静岡健康・長寿学術フォーラムは静岡県を健康長寿の先進地とするため、1995年12月のプレフォーラムを皮切りに、2016年まで22回のフォーラムが開催されてきました。その間、2010年までは静岡県が主催していましたが、2011年からは開催方法が見直され、本学をはじめとする4つの機関で構成する実行委員会で開催することとなり、本学に事務局が置かれました。これまで22年間の足跡を、本学が果たしてきた役割とともに振り返ります。

1995年12月のプレフォーラム開催に先立ち、「静岡健康・長寿学術フォーラム組織委員会」が立ち上げられ、本学の星猛学長（当時）が組織委員長に、薬学部、食品栄養科学部、国際関係学部から計5名の教員が委員に就任し、企画運営に参加しました。「健やかな長寿を科学する」というテーマのもと、アメリカ合衆国、フィンランドからの3人の海外講師を含め、国内外の健康・長寿研究の第一人者12人が静岡に集結し、国際的な議論が展開されました。

1996年から2010年まで静岡県が開催した計15回のフォーラムは、静岡市を主な会場に、「老化」、「認知症」、「がん」、「ウィルス」、「遺伝子」、「ストレス」、「再生医療」、「健康長寿社会」などをキーワードに、延べ65ヶ国・538人の講師を招聘し、開催日数は2～4日で、浜松市へのサテライト会場の開設、静岡がん会議の開催、ポスター・ディスカッションなどを含め、さまざまなスタイルで展開されてきました。その中には、第3回の三笠宮寛仁親王殿下による特別講演や、2002年にノーベル生理学・医学賞を受賞されたシドニー・ブレンナー博士の第6回、第10回の2回の講演が含まれ、参加者は延べ27,000人にのぼりました。

この間、本学からは、毎回、組織委員会に6～9人が、実行委員会には6～11人と、毎年多くの教員が企画運営に参加し、浜松医科大学、静岡大学と連携しつつ、フォーラムの企画運営の中心的な役割を担ってきました。特に、第11回フォーラムでは、「自然からの恵み“薬食同源”—21世紀COEプログラム（先導的健康長寿学術研究推進拠点）からの発信」と題して、本学から14人の教員が研究成果を発表しました。



第21回　ポスターセッション

2011年からは、本学、静岡大学、浜松医科大学、静岡県の4機関で構成する実行委員会での開催となり、木苗直秀学長（当時）が実行委員会委員長に就任しました。その年の第16回フォーラムでは、3月に起こった東日本大震災を踏まえて、「震災と健康」という県民フォーラムを開催するなど、タイムリーな内容を取り上げました。また、2014年の第19回フォーラムは初の県東部（沼津市）での開催を果たしました。また、若手研究者のポスターセッションを毎回開催し、研究者間の交流はもとより、フォーラムで講師を務めた国内外の研究者からの助言を得られる機会を提供し、優秀な研究発表には優秀賞を授与しています。

2015年の第20回フォーラムは、新たに本学着任した鬼頭宏学長が実行委員会委員長を務め、20年のフォーラムを総括するとともに、今後に向け、より若い世代の参加促進のために、様々な分野の研究を行う高校生同士の交流を大学院生がサポートする高校生セッションが新たに開催されました。

これまで計22回のフォーラムに延べ712人の講師が招聘され、参加者数は延べ37,168人に達しています。このような取組により、国内外の科学的知見の蓄積や研究者の幅広い交流の促進を図るとともに、県民に対する健康・長寿の意識啓発を図り、静岡県の健康長寿日

本一や健康関連産業の振興の一翼を担ってきました。

今後もこのフォーラムを通じて、健やかな長寿社会の実現に向け、若手研究者の育成を図りつつ、健康・長寿科学研究の深化、少子高齢社会のより良いあり方の追求などに取り組んでいきます。

第21回　高校生研究・開発交流会

静岡健康・長寿学術フォーラム　テーマと参加状況

回 数	テーマ	日 数	参加国数	講師数	参加者
プレ(1995)	健やかな長寿を科学する	2	3	12	952
1（1996）	いかに病気と戦うか　−現在そして将来−	4	4	37	2,308
2（1997）	長寿社会に向けての疾病抑制—寝たきりの防止に向けて−	4	12	62	1,687
3（1998）	がんへの挑戦:進歩と希望	4	15	52	3,507
4（1999）	賢い食生活で健康長寿をめざす	4	13	53	1,835
5（2000）	老化機構研究の最前線と後期高齢者の健康問題	2	4	32	766
6（2001）	ゲノム創薬と21世紀の医療	2	2	27	1,461
7（2002）	健康長寿への自然科学、社会科学からのアプローチⅠ	2	3	30	1,512
8（2003）	健康長寿への自然科学、社会科学からのアプローチⅡ	2	4	38	1,310
9（2004）	現代ストレス社会における“心と体の健康”	2	5	41	2,038
10（2005）	健康長寿の科学・文化を考える“フォーラム10年の歩みと未来への提言”	2	5	35	2,497
11（2006）	自然からの恵み“薬食同源”−21COEプログラム（先導的健康長寿学術研究推進拠点）からの発信−	2	2	28	2,102
12（2007）	光を当てて、こころとからだの危険をさぐる −21世紀COEプログラム（メディカルフォトニクス）からの発信−	2	3	23	1,671
13（2008）	元気な血管で健康な長寿を −老いは血管に始まる	2	3	29	1,823
14（2009）	再生医療−未来への展望	2	1	24	1,156
15（2010）	認知症克服で健やかな長寿を〜創薬と医療	2	5	27	1,328
16（2011）	異分野の科学が融合して健康長寿社会を創造する 〜薬食融合、医工連携、医療、経営、保健・防災〜	2	3	31	1,477
17（2012）	超高齢社会を支える健康長寿科学とセルフケア	2	8	33	1,842
18（2013）	超高齢社会を支える健康長寿科学とセルフケアⅡ 〜健康長寿社会へのアプローチ〜	2	2	28	1,634
19（2014）	超高齢社会を支える健康長寿科学とセルフケアⅢ 〜健康長寿ふじのくに　さらなる挑戦〜	2	3	21	1,112
20（2015）	次世代につなぐ健康長寿　生涯を通じた健康を考える	2	2	34	1,867
21（2016）	健康・長寿社会を支えるモノづくり・人づくり 〜生命科学から見たモノづくりの可能性〜	2	2	15	1,283
計			104	712	37,168

1988年（2期工事中）正面玄関側から講堂方面を望む

1989年（平成元年）4月当時の正面玄関付近

開学当時の食品栄養科学部棟